

クメール語の受動表現について

上田 広美

1. はじめに

クメール語¹の受動表現に関する先行研究としては、福田(1976)のほか、タイ語、ラオ語、ベトナム語等インドシナ諸言語の受動動詞を対照した Nomura (1992)、及び学習書や文法概説中の若干の記述があるのみである。福田(1976)、坂本(1988)、Nomura (1992)は/trəv/²を用いた受動表現(例1a)を取り上げている。(例1a)では、受動動詞/trəv/に、動作主/kəət/<彼>と動作/vəəj/<叩く>が/kəət vəəj/<彼が叩く>という文の形で後続している。

(1a) kɲom trəv kəət vəəj
私 彼 叩く

<私は彼に叩かれた>

(Nomura)³

一方、Jacob (1968)は、クメール語は受動表現を用いないとしている。また、Khin (1999)も、本来クメール語は受動表現を用いず、/trəv/を用いた受動表現は、1960年代に一部の作家が英語やフランス語からの影響を受けて、外国語の受動表現の翻訳として用いるようになった誤用である、としている。

本稿の目的は、受動動詞とされている/trəv/の用法について先行研究を概観し、資料中の用例から受動表現の語順と意味的制約について考察することでクメール語の受動表現をめぐる問題点を整理することである。

資料としては、下記に示す現代文学作品⁴を用いた。先行研究中で指摘されているように受動表現の使用実態が変化してきているのかどうか調査するため、1960年代の作品と近年の作品の中から、国定国語教科書に採用された作品、文学賞受賞作、発行

¹ 基本語順は、主語+述語+補語、被修飾語+修飾語、付属語+自立語であり、語形変化はない。

² 以下、本稿の表記は音韻表記で、坂本(1988)に従う。

³ 例文中の/trəv/に下線を伏す。先行研究中の例文も、本稿に掲載するにあたり表記と番号を統一し、逐語訳と全文訳の和訳を付加した。

⁴ 資料の一部(RPH, KPM, PNP, KTH)は、平成19-20年度科学研究費補助金(基盤C)「現代カンボジア文学の翻訳と研究」(代表:岡田知子)により入手したものである。頻度調査に関しては東京外国語大学所蔵のKWIC索引を利用した。

- (5) baə lòok jam tnam nih træv cèə haəj
 もし あなた のむ 葉 これ 治る た
 <この薬をのめばきつと治る> (Nomura)

3. 受動表現の構文

前述の通り、先行研究は、クメール語の受動表現の存在を認めるか否かで2つのグループに分類される。後者のグループとしては、Jacob (1968:149-150) が、クメール語には受動態をつくる動詞形態や小辞が存在しないため、英語の受動文は能動文に変えてから翻訳すべきだ、としている。また、Khin (1999:323) は、/træv/を用いた受動表現は、英語やフランス語からの翻訳として用いられるようになった誤用である、としている。

一方で、福田 (1976) は、クメール語にはたしかに語形変化は存在しないものの、Jacob (1968) の指摘はクメール語の実態にそぐわないと考え、「受動的意味を表わすとされる述部にはいずれも/træv/がその先頭に立っていることがわかる。そしてその述部の構造は次の4つのタイプから成り立っている」として、次に示すA型、B型、C型、D型を挙げている。

- A. træv + N
- B. træv + V
- C. træv + kèe⁶ + V
- D. træv + N + V

この4つのタイプのうち、A型には2章で挙げたNomura (1992) の(例3) <くじに当たった>が該当する。B型、C型、D型は、「3種類の型に分けたのは、いわば便宜上のことにすぎない」とされ、いずれも/træv/に動作主と動作が文の形で後続しているが、その動作主がB型では省略され、C型では3人称代名詞/kèe/によって、D型では名詞によって表わされている。福田 (1976) は、この4つのタイプの用例を検討し、そのうち、「/træv/+Nなる辞列と受動的意味との間にいつも平行性が存在するわけではない。更に、受動的意味を有すると考えられる場合であっても、動作主が指示されることは決してない」A型をのぞき、B型、C型、D型について、「一定の辞列が一定の内容と平行性をもって結ばれていることから、それらの文を受動構文(受動文)と呼ぶことができるであろう」としている。

⁶ 3人称代名詞。動作主について述べた4章で後述する。

また、坂本（1988:1488）は、受動態の例として、Nomura（1992）と同じくAはBに「たたかれた」という例を挙げ、「/trəv/の後ろの部分、すなわちB vèaj は、『Bがたく』という文になっており、日本語の『Bにたたかれる』の『に』が補文の主語を表わしていることに対応していることは興味深い。」と述べている。

本稿で扱った資料中の用例も、また聞き取り調査によっても、/trəv/を用いた受動表現は、4章で後述する意味上の制約はあるものの使用されており、福田（1976）、Nomura（1992）、坂本（1988）の記述の通り、クメール語では[/trəv/+N（動作主）+V（動作）]という受動表現が存在すると言える。

4. 動作主

本章では、受動表現中の動作主の表わされ方について、3人称代名詞の/kèe/と、前置詞/daoj/の用法を考察する。

4.1. 3人称代名詞/kèe/

前章で述べたように、/trəv/を用いた受動表現で、動作主を表す名詞、代名詞は/trəv/に後続するが、福田（1976）の4つのタイプでいえばB型のように動作主が現れないこともあり、C型のように「動詞のまえに/kèe/という不特定・不定数の3人称代名詞が現れ」ることもある。

クメール語の3人称代名詞としては、主に/kəət//kèe//vəa/の3種が用いられ、年齢や世代の差によって使い分けられる。3種のうち/kèe/は、特定の単数（例6）複数（例7）を表わすことも、不特定の人（々）を表わすことも（例8）ある。

- (6) kèe hav jəəŋ haəj mae
 人 呼ぶ 我々 た 母
 <（お客さんが）呼んでるわ、お母さん> (RPH)
- (7) kèe tɛəŋ pii cɛh tae rɛək nòm bəncok lək
 人 全て 2 してばかり 担ぐ 麵 売る
 <彼女たち2人は麵を売り歩いていた> (RPH)
- (8) vèəcaə kəmləh priəp dooc kèe cɛəh saŋ ləə pləəŋ
 ことば 青年 比べる 同じ 人 散らす 油 上 火
 <青年のことばは火に油を注ぐようなものだった> (RPH)

/trəv/を用いた受動表現においても、動作主を特定する必要のない場合には、このような/kèe/が用いられることがある。以下に例を示す。

- (9) kɲom muət phèək lòok kruu nèək kruu tètəŋ ʔəh
 私 友人 先生 すべて
 trəv kèe cònləəh ceŋ pii tii kroŋ
 人 避難する 出る から 都市
 <私も友人も先生たちもみな都市から追い出され(離ればなれに
 なった)> (PNP)

しかし、(例 9) のような受動表現を使わなくても、(例 8) のような/kèe/を主語とする能動文によって受け身的なことがらを表わすことが可能であり、かつ、6章で後述するように多用されている。

4.2. 前置詞/daoj/

[/trəv/+N (動作主) + V (動作)] という語順以外にも、福田 (1976) は、前置詞/daoj/によって文末で動作主を示す構文 [/trəv/+V (動作) +/daoj/+N (動作主)] を挙げている。これについては、「最近では動詞の動作主をその直前に置かないで、/daoj/ (または/daoj saa/) 『~によって』+動作主を動詞のうしろに配する、よりフランス語的な構文法も使用されるようになってきて」いるとしている。しかし、本稿の調査では、福田 (1976) の挙げた (例 10b) も、同じく/daoj/を用いた (例 1b) も不可能であった。

- (10a) vèə trəv klaa sii
 彼 トラ 食う
 <彼はトラに食われた>
- (10b)*⁷ vèə trəv sii daoj klaa
 やつ 食う によって トラ (福田)
- (1a 再掲) kɲom trəv kəət vèəj
 私 彼 叩く
 <私は彼に叩かれた> (Nomura)
- (1b)* kɲom trəv vèəj daoj kəət
 私 叩く によって 彼

しかし、前置詞/daoj/を用いて動作主を表わすことがつねに不可能なわけではない。<フランス語が話されている>という (例 11) では、(例 11a) [/trəv/+N (動作主)

⁷ 不自然であるとインフォーマントが判断した例の番号に*を付す。

+V (動作)] の語順も不自然とされ、(例 11b) のように、3 人称代名詞/kèe/を主語とする能動文が用いられる。しかし、<ごく一部の人に(話されている)>という特定の文脈を与えることによって、(例 10) で不自然とされていた前置詞/daoj/を用いた(例 11c) が許される。

(11a)* nàv pròtèh kaanaadaa phèəsaa baaraŋ trəv kèe niijèəj
 で 国 カナダ 言語 フランス 人 話す

(11b) nàv pròtèh kaanaadaa kèe niijèəj phèəsaa baaraŋ
 で 国 カナダ 人 話す 言語 フランス
 <カナダではフランス語を話している>

(11c) nàv pròtèh kaanaadaa phèəsaa baaraŋ trəv niijèəj
 で 国 カナダ 言語 フランス 話す
 daoj pròcèəcòn muoj phèək
 によって人 1 部分
 <カナダでは、ごく一部の人がフランス語を話している>

以上のことから、受動表現の動作主は、[/trəv/+N (動作主) +V (動作)] という語順で表わされるが、動作主を特定する必要がない場合には3 人称代名詞の/kèe/を主語とする能動文の方が好まれるようである。逆に、動作主を特定しかつ明示したい場合には、前置詞/daoj/によって文末で動作主を示す構文 [/trəv/+V (動作) +/daoj/+N (動作主)] が用いられると考えられる。

5. 意味的な制約

本章では、/trəv/を用いた受動表現が、どのような動詞の後続を許すかについて考察する。

前述の坂本(1988)では、/trəv/を用いた表現について、「また、受動態は、『殴られる』『殺される』『盗まれる』のような被害、損害を表わす事柄には使用できるが、『愛される』『ほめられる』『(多くの人に)愛読される』というように、『不利益』を表わさない場合には使用できない。このことも、日本語で、損害、被害を(特に自動詞の)受動態で表わすことがあるのと似ている」とも述べられている。

しかし、福田(1976)は、用例を検討した結果、「/trəv/+Vによって表現される内容がN 1にとっていわゆる『迷惑』とか『被害』を意味する時のみ(能動態から受

動態への)⁸変換が可能なのかということ、かなりの程度そういう傾向は見うけられるとはいうものの、つねにそうであると言い切れない」とし、「ある時期には/trəv/+Vなる結合はその内容が主語N1にとって主として迷惑・被害を意味する時にのみ可能であったと考えられる。ところが、恐らくはヨーロッパ語（とくにフランス語）の受動構文の影響によって迷惑・被害に相当しない時にも/trəv/と他動詞との結合が徐々に可能になりつつあるのではないかと考えられる」としている。また、前章で挙げた構文 [/trəv/+V (動作) +/daoj/+N (動作主)] が使用されるようになったことに伴い「積極的な評価を内容とする動詞と結合する傾向が見られる」ともしている。

本稿では、坂本（1988）の挙げた「愛される」「ほめられる」「愛読される」といった、明らかに不利益を表わさない動詞について聞き取り調査をしたが、/trəv/を用いた受動表現を用いることは可能であった。以下に例を示す。

(12a) soophaat trəv maanjaan srəolaj
 (人名) (人名) 愛する
 <ソパートはマンヤーンに愛されている>

(13) kɲom trəv lòok kruu soosəə
 私 先生 ほめる
 <私は先生にほめられた>

(14) prəolaom lòok nih trəv kèe niyòm ʔaan craən
 小説 これ 人 好む 読む たくさん
 <この小説はたいそう愛読されている>

(15a) lòok kruu nuh trəv koon səh kòoròp nah
 先生 それ 生徒 尊敬する とても
 <その先生は生徒にとっても尊敬されている>

しかし、一般には、(例 12a) (例 13) (例 14) (例 15a) のような/trəv/を用いた受動表現よりも (例 12b) (例 15b) のような能動文が好まれるようである。また語順は同じであるが/trəv/を用いず (例 15c) のように主題化する表現も用いられる。

(12b) maanjaan srəolaj soophaat
 (人名) 愛する (人名)
 <マンヤーンはソパートを愛している>

⁸ この () 内のみ先行研究中の文脈から筆者が加筆した。

- (15b) koon səh kòròp lòok kruu nuh nah
 生徒 尊敬する 先生 それ とても
 <生徒はその先生をととても尊敬している>
- (15c) lòok kruu nuh koon səh kòròp nah
 先生 それ 生徒 尊敬する とても
 <その先生は生徒がととても尊敬している>

もう一点、福田 (1976) が指摘した近年の変化、すなわち、「迷惑・被害に相当しない時にも/trəv/と他動詞との結合が徐々に可能になりつつあるのではないか」という点について、本稿では 1960 年代から 2000 年代までの資料を調査した。

1960 年代の文学作品中の用例を検討した結果、以下の表に示すように/trəv/を用いた受動表現そのものの頻度が低かった。

/trəv/総数	うち受動表現	資料	頁数	出版年
41	0	PSP	156	1960
75	6	KLP	129	1960
34	3	SPT	85	1965
103	10	JSR	197	1967

また使用されている場合にも、/trəv/に後続する動詞(句)は、(例 16)に挙げた /mə̀l ɲə̀j/ <軽蔑する> ほか、/baj/ <撃つ> /plɔn/ <盗る> /və̀j/ <殴る> /bɔndɛj/ <追い出す> /bɔntòoh/ <責める> /diəl/ <ののしる> /sdəj dak/ <叱る> /praə/ <使う> /cap/ <捕える> 等、不利益を表わす場合であった。

- (16) m̀ɔnuh kr̀ɔ t̀əɲ puoŋ craən tae trəv k̀e mə̀l ɲə̀j
 人 貧しい すべて 多く 人 見る 容易
 <(多くの場合) 貧乏人は軽蔑されがちだ> (SPT)

1988 年の小説でも、(例 17)に挙げた /və̀j plɔn/ <強奪する> ほか、/sɔmlap/ <殺す> /bɔŋkhɔm/ <強制する> /caot/ <尋問する> /j̀ɔk t̀əv/ <連行する> など、不利益を表わす動詞(句)が/trəv/に後続していた。

- (17) kɔət trəv k̀e pruot və̀j plɔn j̀ɔk l̀ɔj kɔət
 彼 人 協力する 叩く 奪う 取る 金 彼

(19a) soophaat trəv maanjaan cəən cəəŋ
 (人名) (人名) 踏む 足
 <ソパートはマンヤーンに足を踏まれた>

(19b) maanjaan cəən cəəŋ soophaat
 (人名) 踏む 足 (人名)
 <マンヤーンはソパートの足を踏んだ>

なかでも不利益を表わす (例 19a) (例 20) (例 21) は自然と考えられるが, (例 22) (例 23) (例 24) はあまり用いられないようである.

(20) soophaat trəv maanjaan luoc kaaboop ləj
 (人名) (人名) 盗む 財布
 <ソパートはマンヤーンに財布を盗まれた>

(21) kaaboop ləj trəv soophaat luoc
 財布 (人名) 盗む
 <財布が (ソパートに) 盗まれた>

(22) ʔaakəə tməj trəv soophaat kəə saŋ
 建物 新しい (人名) 建設する
 <新しいビルが (ソパートによって) 建てられた>

(23) nəv ləə cəŋcəəŋ kəmnuu trəv kəə dak
 で 上 壁 絵 人 置く
 <壁に絵が掛けられている>

(24) soophaat trəv maanjaan prap thaa
 (人名) (人名) 告げる と
 trooləp təv ptəəh vuŋ təv
 帰る 行く 家 戻る 行く
 <ソパートはマンヤーンに「家に帰れ」と言われた>

日本語では受動表現を用いるがクメール語では許容されないものは, 自動詞からの間接受身<私は赤ん坊に泣かれた>であり, (例 25) のような表現のみが可能であった.

(25) jəp məŋ koon ŋaet jəm baan cəə kŋom deek
 昨夜 赤ん坊 泣く それで 私 寝る
 muun lək
 ない 眠れる

<昨日の夜、赤ん坊が泣いたのでちっとも眠れなかった>

7. おわりに

以上、本稿ではクメール語の受動表現について、先行研究にもとづき、1) 受動表現が存在するか、2) どのような構文が可能か、3) どのような制限があるか、について考察した。第1, 第2の点については、本稿で収集した用例をみても、福田(1976)、坂本(1988)、Nomura(1992)の示す通り、現代のクメール語では受動表現が存在し、[受動動詞/trəv/+N(動作主)+V(動作)]という構文が可能であると考えられる。第3点については、坂本(1988)の示すように不利益を表わす場合のみに制限される、とは言えない例も見られるものの、今回調査した文学作品中の例からは、福田(1976)が示すほど近年受動表現の許容度が高くなっているとは考えられなかった。

今回の調査では文学作品という限定された資料から用例を収集したため、より多くの資料から/trəv/を用いた受動表現の使用実態について調査をすることが今後の課題である。

参考文献

- 福田権一. 1976. 「カンボジャ語の受動文について」, 『中京大学文学部紀要』
11. 1, pp. 1-21.
- Huffman, Franklin Eugene. 1967. *An Outline of Cambodian Grammar*, Ann Arbor:University Microfilms.
- Jacob, Judith M. 1968. *Introduction to Cambodian*, London:Oxford University Press.
- Khin, Sok. 1999. *La grammaire du khmer moderne*, Paris:You-Feng.
- Nomura, Naomitsu Mikami. 1992. "A semantic analysis of the so-called passive verbs in some Indochinese languages" *Mon-Khmer Studies* 21 pp. 91-106.
- 坂本恭章. 1988. 「クメール語」, 『言語学大辞典第1巻世界言語編(上)』, 三省堂, pp. 1479-1505.